針葉樹会報

第94号
2001年7月

目次

追悼

松下順吉君の霊に …………… 小林　茂雄　2
ダンディな松下さん ………… 石井左右平　3
笠原さん追悼 ………………… 澁谷　一郎　4
甘利仁朗君の七年忌 ………… 松尾　寛二　5

ボリビア―日本　登山交流傍史 … 中村　保　6
三輪の山別れ歌 ……………… 加地　幸雄　8
ゼミ登山あれこれ …………… 石　弘光　9

■ニュージーランド紀行
プロローグ ………………… 佐薙　恭　12
ミルフォード・トラックのこと ． 石井左右平　12
Milford Track トレッキングと
Mt. Cook 周辺の記録 …… 高崎　治郎　13
ミルフォードを歩く共唱共随の夫婦達
………… 上原　利夫　17
70歳のトレーニング ……… 山崎　擴　18

針葉樹総会報告 ……………………… 19

〈93号「本をめぐって」の訂正と注記〉 … 23
編集後記 ……………………………… 24

表紙写真＝マウント・クック遠望（佐薙撮影）

発行日　2001年7月26日
発行者　針葉樹会
印刷所　ヤマノ印刷㈱

針葉樹会報
第94号

編集人　佐薙　恭
〒240-0066
横浜市保土ヶ谷区釜台町 5-4-806
会報幹事／佐薙　恭、井草長雄
川名真理、大谷公重

松下順吉君の霊に

小林　茂雄（昭19）

君は平成十三年二月二十日未明、忽焉としてその生涯を終へてしまった。此の歳になれば、お互ひに別れの時期の、さまで遠からざることは、内心、自覚しながらも、小平や国立を経て長年一緒に山へ登った仲間達なら、いつでも逢へるといった気持があったのでしょうか。まだまだ言い足りない何かがあった様な気がするほど、アッという間の出来事でした。

松下君。

世の人の出逢ひというものは、神の導きによるものなのだらうか。私が昭和十四年、東京商科大学予科一年四組に入学した時、同じ組に高野秀男君（故人）と君が山岳部員として在籍していた。そして、しきりに山岳部への入部を薦めてくれたので、私は翌年の昭和十五年の春、部員のはしくれに入れてもらう先輩や仲間達の知遇を得られるきっかけにならうとは夢にも思はず、今にして思へば、ただただ見えざる手に従った幸運を思うのみです。

平成8年2月24日、四尾連湖から蛾ヶ岳へ行ったときのスナップ。後ろは山崎擴さん（石井左右平さん撮影）

松下君。

君とは予科時代から山へも、遊びにも、よく一緒に出かけたものだった。君は恵まれた体躯と長い足でスタスタとよく飛ばして私達を困らせていたし、都会の生活でも東京市立一中というハイカラな中学校を卒業しただけあって、私達のような野暮な学生の知らない世界もよく知っていた。私もよく君のあとについて、高円寺の喫茶店で深刻な顔をしてレコードを聴いたり、新宿の武蔵野館にフランス映画やドイツ映画を見に行ったり、ムーラン・ルージュの明日待子を応援したり、兎にも角にも君にはいろいろなことを教えてもらったものでした。

また、冬のスキー合宿の時など、山小舎の炬燵の中で、君は時々、興にのると、西部劇映画に出て来るゲーリー・クーパーが指先で器用に煙草を巻いて傍らの女性にその紙の端を唇で濡らして留めさせ、ランプのホヤの上の方で火をつけていたのを、説明つきで上手に真似してみせる茶目気も持っていた。

併し、一方では妙にシャイなところがあって、大きな身体を小さくしてモゾモゾと何か云っている時は、ほほ笑ましくさへもあった。かと思うと、人には見えぬ芯の強さがあり、これはこれで亦、仲々のものでチョットやソットでは妥協しないものがあったと思う。

私達が初めて参加した涸沢の合宿は私達新人にとっては見るもの総てが驚きであった。私より一年早く入部していた松下君は私に穂高の峰々を説明しながら「どうだ。凄いだろう……」と自分がカールを作った様な嬉しそうな顔をしていたものでした。

そんな中で、ある日、炊事当番にたった君が作ったカレーライスを、上級生の誰かが「う

まくない」と言ったとかで、君がムクレていたことがあった。皆がキャンプ・ファイアを囲んでゐる中で、君一人だけが焚火に背を向けて憮然とした顔でパイプをくわえていた姿は、今思ってもおかしいやら、気の毒なやら。あたりは次第に暗くなり、折りしも北尾根のタヌキ岩に大きな月が上っていた記憶があります。後日（数十年後のことであるが）君にこの話をしたら、君は黙ってニヤニヤ笑っておりました。

私達が本科生となる頃は、時代の流れは山岳部にとって日一日と厳しいものとなって来ました。部としての新しい発展を求めるどころか、これ迄の伝統を如何にして守り、部の存続を絶やさぬようにするか、あとに続く部員の確保に精一杯の努力をしなければなりませんでした。結局、君と私は、その後、一緒にザイルを組んだり、部としてのまとまった目標を追求する機会もなく、夫々が手分けして出来るだけ多く後輩部員と行動を共にするよう努める以外になかった時代でした。

＊　＊　＊

戦後、君は予科の時の同級の山路君に乞はれて、彼の片腕として播磨興産（株）の経営に参加するため関西に移り、多くのゴルフ場の経営にも腕を振ひ、また新たに結成された労働組合を相手に苦労しながらも、業績の向上に寄与するところ大であったと聞いてゐたが、盟友の山路君の急逝により関西での仕事をやめ、再び東京へ戻って来たので、我々、山の仲間は皆よろこんで君を迎へたものであった。

併しながら、いつの頃からか、君は大きな手術を重ねたりして、流石の体力も相応に弱っていた筈であるが、山へ誘うと極力、同行しようとしていたので、目的の山によっては、無理をさせはしないか、どうかと、神経を使ったことも再三であった。主に山崎拡君が我々大正年代のロートル向きに計画を立て、石井左右平君と共に我々を誘ひ出してくれていたことを君は心から喜んでいました。

平成十一年十一月。松下、石井、山崎、小林の四人が松本駅から車で美ヶ原の王ケ頭小舎まで直登し、玄関に横付けしてもらひました。翌日は珍しく風の無い絶好の山岳展望日和となりました。歩いて途中まで下るという石井、山崎の両君を我々二人が後から宿の車で拾うということにして、たっぷりとある時間を惜しみなく使って草原に腰を下ろし、ただただ四周の山なみを眺めていました。

八ヶ岳から富士山、南アルプスから中央アルプス、そして穂高から後立山まで。ゼーンブ見ることが出来ました。遥かな空に連なる山々と対座していると、限りない悔恨の想ひが、あれもこれもと溢れて来ます。

松下君。

無風といっても身体の調子で冷たい空気を極力避けていた君が、この時は、いつ迄も黙って山に向かっておりました。

そして、これは私と君が同行した最後の山行となったと同時に、君自身の最後の山行でもあったことになります。

六十年の交友を通じて、私がいま君に捧げられるものは、この拙い想ひ出しかないことをどうか諒として下さい。

合掌

ダンディな松下さん

石井　左右平（昭23）

昭和17年春、予科入学と同時に山岳部に入れて貰った。その時のトップが山田さん、久保さん、根本さん、佐藤さん、森さん等々の所謂本3。10人位おられたか。次の本2は居なくて、本1は、小林、松下、原田、高野、林戸、鈴木、大野の諸先輩。記憶では、本3の人々は坊主刈が多く、本1が殆ど長髪だっ

たと思う。こちらはまだ17歳になったばかり。勿論、クリクリ坊主。こうした諸先輩がなんとなくまぶしく感じられた。そのなかでも松下さんのダンディな雰囲気が印象深い。

入部して間もなく後立山縦走の合宿があったが、矢張り本1の人々が元気だった。考えて見れば皆さん二十歳になったばかりかそのあたりで、青春のさかりだったわけである。その為もあって、本3の人々がかなり老けていた印象が残っている。17歳と23、24歳の差だろう。

山田さん達本3は我々の入部後5ヶ月位で繰り上げ卒業となって軍隊に行かれた。本1の方々も翌18年暮れにあとを追われた。だから先輩のもとでの部生活といっても、ほんの僅かの間でしかなかった。然し、この方々との思い出は今でも深く刻みこまれている。

1994年9月の針葉樹会の徳沢合宿に松下さんも参加。蝶が岳に行ったが、途中で松下さんがやや不調で、その内に姿が見えなくなった。自分も膝の具合が悪く、松下さんは多分くだったのだろう、と小林さんたちと分かれて下った。ところが松下さんが下りていない。結局は、かなり不調だった松下さんは上りつづけ、上で小林さんたちと一緒になった。頑張ったものである。

その後、おもに山崎の主導で、松下さん、小林さんをさそって四尾連湖とか杓子山とかにいった。最後が99年11月の美ヶ原行だった。この時はもう登るということが楽ではなくなっていたが、それでもニッカボッカーでキチンとした昔のままのダンディな松下さんだった。

笠原さん追悼

澁谷　一郎（昭28）

笠原さんは、私の出た東京開成中学の出身で、同窓会の名簿によれば、昭和十六年の卒業になっています。それで十九年卒の私にとっては三年の先輩に当る訳です。しかし中学では全く接触が無かったのですから、思い出といえば、すべて商大山岳部でのことになります。

私は終戦直後に商大予科へ入学し、中村正司君たちと同じ年度に入部しました。おそらくその新人歓迎会で、たまたま笠原さんと同席して、同じ中学だと判ったのです。

何より鮮明な記憶に残っているのは、その年の梅雨の直前に、歓迎登山で甲斐駒へ登った時の事です。そのリーダーが笠原さんでした。五、六人の参加者でしたが、新宿から夜行の終列車で出かけ、山中の無人小屋で泊まった翌朝、雪のように白い花崗岩からなる頂上を踏み、生まれて初めて雲海の上にある三千メートル近い高峰に登った感激が忘れられません。

リュックもシュラフも、ほとんどの用具が上級生からの借り物で、山歩きでの足の運び方、急坂での息の継ぎ方など、第一歩からのすべてをリーダーから親切に教えられました。登頂後、小屋に戻って往路を帰ったのですが、彼が東京へのミヤゲと称して、小屋裏に密生していた太い山蕗をバサバサ刈り取り、キスリングのリュック一杯に詰め込んでいた素振りが、今思い出してもユーモラスなのです。

その後、おりに触れては国立の部室でお目にかかり、色々と教わることが多かったのですが、学生にしてすでに人生の達人の風格を帯びていたように記憶しています。しかしどういう訳か、合宿でも個人山行でも、ご一緒する機会がとうとうありませんでした……。

何しろすべては五十年近い前のことで、空漠としたおぼろげな記憶の彼方です。人生の行路も、すっかり駆け離れてしまいましたが、私が現役を終えたここ十年ほどになって、中

学の同窓会や、可さんの奥さんの法事などの席で、お顔を見る機会があり、国立の喫茶店でご説を拝聴に及んだ事もありました。相変わらずの達者な語りぶりで、昔の部室での雰囲気を思い出させられましたが、それももう聞けない事になって、しきりと寂寥が感じられてなりません。

甘利仁朗君の七年忌

松尾　寛二（昭31）

甘利君去って早や六年。七月七日の命日を前にした五月十九日、七年忌の法要が八王子の本立寺で執り行われました。

参列者はご親族と山の友人の六十余人。読経、焼香、墓参でご冥福を祈った後、高尾山口の蕎麦屋に席を移して賑やかな宴会になりました。

針葉樹会からは、伊藤恙生、石原、奥野、白川、須山、春日井、佐薙、Y中夫人、松尾、宮川、山本、岡垣、市畑、倉知(敬称略)の十四人が出席しました。我々貸切りの部屋でお心尽くしの美酒佳肴を頂き、中村夫人が持参した甘利・Y中両君の楽しそうな笑顔のツーショット・スナップを見ながら、思い出話や懐かしい歌に時の経つのを忘れ、四時過ぎに呂律怪しく山讃譜を合唱して散会。

後日、甘利夫人から頂いたお礼状に、

「……お蔭様で、甘利が居るのと同じ雰囲気の素晴らしい法事になりました。甘利が亡くなりまして丸六年の五月十九日は、私には初めての楽しい一日でした。針葉樹会・紫峰山岳会・山の諸先輩の変わらない友情に暖かく包まれたこの日、本当に幸せでした。」

とありました。

人の評価は棺を覆った後に決まると言います。故人を懐かしんで人が集まるのも、そのお蔭でお互いに旧交を温めることが出来るのも、甘利君の遺徳と言うものでしょう。

編集子より

＊92号6頁掲載の写真で右側の方が「氏名不詳」となっていました。船本文治さん（昭15）からお手紙で、その方は故岩崎利一さん（昭15）ですとのご連絡をいただきました。有り難うございました。

ボリビア―日本　登山交流傍史

Alfred Martinez
中村　保（昭33）

3月上旬に、日本山岳会の(前)海外担当理事・増山茂ドクターのEメールがボリビアのラ・パスから届いた。同氏は高所医学研究のため客員教授としてラ・パスに滞在中であり、ボリビア登山界の長老、アルフレッド・マルチネス氏との懇談の様子を伝えてきたのである。これによって、1961年の一橋大アンデス遠征隊が同志にいかに大きな影響を与え、日本―ボリビア登山交流史に最初の画期的なマイル・ストーンをつくったという事実を今にして教えられた。40年前に一橋隊はたいへん価値ある功績を残していたわけである。まず一番に吉沢さん、甘利さん、そして中島君に知らせてあげたいニュースである。以下、増山ドクターのメールを紹介する。

目の前にいる初老の男性は赤くささくれだった頬をさらに紅潮させて、

「この方、隊長の吉沢一郎氏は立派な紳士でした。とてもよく隊をまとめ上げていました。good, strong, heroic な隊でした。かれはのちほどK２へ行ったはずです。隊員は紳士でありスペイン語を話す方も多くいてすぐ仲良くなりました。一部の方とは最近まで連絡がありました。当時、ボリビアの登山装備はとても貧弱なものでした。かれらから私は、新式の登山パンツやスパッツなど新しい装備と技術を学びました」

小柄だががっちりした体格の男性が見ているのは、５人の日本人が写っている当時のボリビアの新聞である。吉沢一郎、甘利仁朗、中村保、丸山則二、中島寛との注記がある。日本からボリビアに遠征してきた登山隊は数々あれど、ボリビアアンデスの登攀史に、それが英語であれスペイン語の書物であれ、その名前が必ず出てくるのは、この写真の登山隊――１９６１一橋大学隊――と１９６４東京外語大隊のみといっても間違いではないだろう。

後に多くの日本人および日本隊がお世話になる、また登山の功績によりボリビアでは国民的英雄となるこの老人、アルフレッド・マルチネスさんは、その前年メキシコ―ボリビア合同隊で Khumo-Tincuta（５５００ｍ）を登り、Illimani に「Hidalgo」と呼ばれる新ルートを開拓して South-Central の縦走を成し遂げたばかり、まだこの時期は Club Andino Boliviano（ＣＡＢ：ボリビア山岳会）の若手ホープの一人にすぎない。

「この遠征隊に参加できたのは幸せでした。ボリビア山岳会が海外の多くの登山隊と共同して事に当たる最初の時期にあたっており、多くの新しい経験をすることが出来たからです。当時ボリビア山岳会には１００人ほどメンバーがいましたが、だれか行く者はいないかとの誘いに私とノエルが手を挙げたら自然とそう決まりました。」

この隊には、マルチネスと Noel Castillo の二人のボリビア人が参加することになる。

１９５０年代から始まっていた未踏の山域・ピークをボリビアアンデスに求めるパイオニアワークは日本からも登山隊を引き寄せる。１９６１一橋大学隊はまずその場をラパスの北西ペルー国境を含む Apolobamba 山脈に求め、Pupuya 山脈に転じ、今度は、Casisaya,Acamani,Cavayani and Yanaorco を初めて登るというかくかくたる成果を上げる。

この時期、ボリビアンアンデスは初登頂をねらう各国隊で溢れていたといっていいが、この国際的にも特筆される一橋隊に参加したことがマルチネスの将来を決定づけることに

1961年　ボリビア・アンデス　アポロバンバ山群にて
後列左から：中島　寛、Sr. A Martinez
前列左から：甘利仁朗、中川滋夫
（中村 保　撮影）

なる。

　時代なのであろう、こんなエピソードもある。

「**Apolobamba** はペルーの国境地帯にあります。ちょっと向こうはペルー領なのですが、もちろんだれが見張っているわけでもありません。よし、と我々はペルー側に出かけていったものです。中川滋夫は、**Callejon**（５８００m）、**Ananea**（５９００m）にはほぼ頂上まで近づいたはずです。15mだけは残しておきましたが」

……中略……

登山隊ではないが、日本人との交流としては面白いエピソードがある。

　１９６７年、マルチネスは選ばれてフランス・シャモニーのＥＮＳＡ（**National School of Ski and Alpinism**）で学ぶ。各国の精鋭が集まる。ここで一緒に研修を受けたのが、今はなき植村直巳。いいやつだったなあ、よく飲んだもんです、となつかしそう。植村がやや若いか。

　１９７１年のボリビアの新聞の切抜きを取り出す。植村のエベレスト頂上での写真である。登頂後、植村はラパスにマルチネスを訪ね、この写真を渡したのだという。

　伝説。ある日、研修仲間でモンブラン登山競争。前の晩、３時まで飲み続けたマルチネス、ふらふらで宿舎に帰り荷物を作って朝５時にあわてて出発。必死に歩いて頂上へ。なんと一番だったらしい。すぐさま下山して、街に着いたのが夜の12時。そのまま酒場に駆け込んで飲み続けていたところ、役員がやってきて怒られたそうな。ケーブルを使わなかったものだからすわ遭難かと皆で探していたというのだ。つまり、一番下から歩き通してかつ一番だったわけだ。

　これらの登山情報は当地の新聞でも大きく取り上げられ、アルフレッド・マルチネスの名前は登山界では特筆されるべきものとなってゆく。

　以後、英国、チェコ、イタリア、アメリカ、アルゼンチン、チリ、ペルー、オランダ、フランスの各国隊と一緒に登山をすることになる。１９７３年にはボナッティーとともにワイナポタシへ登るなど、国際的な知己も多く持っている。

　マルチネスの本職は山岳ガイドである。しかし、「遠征隊に参加するときはお金をもらうことはありません。全部自費かあるいはボリビア山岳会のサポートによります」

　登山者としての一線を守っているということなのだろう。ボリビア山岳会の役職を長年勤め、会長にも就任している。

「最後の仕事は、中島寛と一緒に行ったワイナポトシでした。中島は１９６１年の一橋隊ではもっとも若い隊員でした。強かった。エベレストに行くことになったはずです。二十年以上過ぎたある日、ブラジルにいた中島から連絡があって、ワイナポトシに登りたいという。１９８３年だったか、ブラジルから何人かの日本人を連れてきました。彼はまだとても強かったですよ。下山の際、懸垂下降時にロープが切れて大変でした。６０００mでビバークを余儀なくされました」

　と写真を見せながら笑う。

「中島はどうしただろうか」
「一昨年亡くなった」
「おお、まだ若いはずなのに」
　マルチネスはこれをほぼ最後の仕事として山岳ガイドの足を洗うことになる。ボリビア山岳会の役職からも離れてラパス郊外の小さな家にまだ若い2人の息子娘と共に住む。息子の **Borris** があとを継いで山を登れるようになりたいという。
「よし、じゃあこんど私とワイナポトシに一緒に行こうか」
　浴びるように飲んだという酒もいまや食卓から消えて、しらふで1961年以降の40年のボリビア日本登山交流史を語って飽きない。
（中村注：1983年の中島君のワイナポトシ登山については同君の遺稿集『一期一会の山、人、本』の144〜162頁に詳しく書かれている）

三輪の山別れ歌

加地　幸雄（昭33）

　日本には山を神聖化する伝統があります。古（いにしえ）からの伝統で一橋の「讃山賦」にもその脈搏が感じられます。元来、神道は諸々の自然現象に「神います」とする傾向が強いので、特に美しい山、厳かな山、親しい山が、信仰の対象になるのは、頷けることです。
　その一例を探ってみましょう。奈良県桜井市の北部に、私はこれと意識して眺めたことはありませんが、三輪山（みわやま）という山があります。きくところによると、往古より、山全体を御神体として神聖視されてきた山で、その御神体を祭るのが、麓にある大神（みわ）神社です。
　時は大化の改新後二十二年の667年、大和から近江の国への遷都です。奈良は盆地で、山々に取り囲まれ、遷都の人々は、住み慣れた大和を後にし、北に向い、山道に入ります。その人々の中に、御輿に乗った額田女王（ぬかたのおおきみ）という宮廷歌人がおりました。彼女にとって、三輪山は「毎日のように都で仰ぎ親しんで来た神います」山であったはずです。井上靖はそう書いていますが（新潮文庫「額田女王」367頁）、流石に至当と思われます。その三輪山に後髪をひかれる己の心を詠んだ歌が万葉集の冒頭近くに収められています（第1巻17）。詠じてみましょう。

味酒（あまざけ）　三輪の山
あおによし　奈良の山の
山の際（ま）に　い隠るまで
道の隈（くま）　い積るまでに
つばらにも　見つつ行かむを
しばしばも　見放（さ）けむ山を
情（こころ）なく　雲の　隠さふべしや

　先ず言葉に注しましょう。「味酒」と「あおによし」はそれぞれ「三輪」と「奈良」の枕詞。「山の際」は「山の間」の意。「い隠る」と「い積る」の「い」は接頭語。特に意味はないようです。「隈」は「曲り角」。「つばらにも」は詳かいものや微かなものを見分ける時にするように、あるいは赤子を見守るように、「じっと目をすえて」。「見放く」は遥かに望む事。「行かむ」と「見放けむ」の「む」

は願望を表し、「行きたいと思う」「望みたいと思う」の意。「隠さふ」の「ふ」は反復や継続を表す接尾語。最後の「や」は言うまでもなく反語。

あゝ、三輪の山よ。
今登り行く、奈良の周辺（まわり）の
　山の間（ま）に
隠れてしまうまで、
この山道の多くの曲り角ごとに、
立ち止り、降り返って
よくよく見て行きましょう。
繰り返し、繰り返し
眺めて行きましょう。
これほど別れを惜しむ山なのに
雲が絶えず掩うのは、
無情でなくて何でしょう。

およそこのような意味でしょう。

三輪山の御神体に通う額田女王の歌心に憑かれてしまいましたので、それを解くために書かせて頂きました。たまには山行譜ならぬ讃山賦もよろしいかとも思いまして。

（編集子注　山讃賦でなく讃山賦とあるは筆者の意図による）

ゼミ登山あれこれ

石　弘光（昭36）

今年の3月、残留していたゼミテンの1人が卒業して、28回（途中で5年間、休ゼミ）続いた石ゼミも終わりを告げた。この間、278名のゼミテンを送り出したから、それなりの責任を果たせたように思う。一橋の教官にとって自分のゼミは、まさに自分の人生みたいなもので様々な思い出が付きまとう。ゼミの指導の最も重要なことは卒論指導であるが、私の場合はどちらかといえばゼミテンを行動をともにした登山、スキーの方が印象に残っている。

29歳の時からゼミを持っているが、最初の頃はゼミ旅行でごくありふれたリゾート地や温泉地へ行っていた。そのころ結婚し子供も小さいこともあり、スキーは続けるものの山登りとはしばらく疎遠になっていた。

30歳代中頃になってやはり昔の山の虫がうずきだし、時間とカネを使ってゼミ旅行をやるなら山登りにゼミテンを連れていってやろうということになった。といっても、高尾山以外に登ったことがない学生も多く、まさに素人集団の登山にならざるを得なかった。ただ幸いなことに、毎年必ずワンゲル部やハイキング部、そして山好きの連中がいたので、20人を超えるグループを引率することはさほど難しくはなかった。

初めの頃は御嶽や平標山などに、私の好みで折々に登っていたが、そのうち大学の妙高山寮を利用しての妙高山（時には、火打山）、あるいは大町エコノミスト村に泊まっての爺ヶ岳と、毎年交代で登山する慣行が次第にでき上がってきた。ゼミテンは2年間、ゼミ登山に参加するので、双方の山に登れる仕組みとなっていた。その代わりに私自身は、2年に1回は同じ山に登らざるを得ない破目に陥った。このやり方でゼミ登山を30年近く続けたから、おのおの山に10数回は登ったことになろうか。

これだけの数の山行を続けていると、様々なことに遭遇する。ポピュラーな山のわりには、妙高山はけっこう厳しい。パーティーの足並みにもよるが、山寮を8時前にでて燕温泉経由で、頂上に立てるのは1時近くであるから、5時間は優にかかる。七曲を越え天狗平にたどり着くことから、足並みが乱れ出す。それから更に鎖場を経て頂上まで2時間近く

もかかるから、元気な奴、息絶え絶えの奴など、様々な状況が繰り広げられ日頃の見られない学生の生態が分かって面白い。

しかし頂上に着けば、万歳である。そこで食べるおにぎりの美味しさに、全員が気力を回復し晴れていれば日本海までの景色を眺め、山登りを満喫することになる。しかし石ゼミ登山の伝統として、2回に1回ぐらいは雨にたたられる。雨の中で握り飯をほうばったり、弁当を広げたとたんに雷雨に遭い、ほうほうのていで山道を駆け下ったこともある。

帰りは大体、頂上を越え周回コースになる燕新道をたどり、出発点の燕温泉に戻ることになる。長助池、大倉池と地塘を眺めながらひたすら歩き、黄金清水で湧き水を楽しめるこのコースもまた長い。その内賑やかな声もとだえ、黙々とただ歩くだけとなる。麻平で朝来た登山路と出合うが、いつも夕闇迫る頃となっている。この山行の最後の楽しみが、山を下りきった所にある野天風呂につかることである。

山すその谷川のほとりにあるこの天然の風呂は、昔は知る人ぞ知る存在で、いつもわがパーティーの独占であったが、最近はこうも行かなくなった。次第に登山者のみならず燕温泉の湯治客にも知られるようになり、込み合うようになってきた。10年ほど前には、われわれがのんびりくつろいで湯につかっていたところ、湯治客のおばあさんの一行がやってきて、われわれが湯から出るのを待つ態勢になった。「お兄さんたち良い身体をしてるね」などと品評され、出るのに一苦労したことを思い出す。

そして昨年、われわれが到着したときの先客は若い女性であった。首まですっぽりつかっており硫黄泉の濁った湯なので、どういう状態で入っているのか不明であったが、われわれが入っても一向に動じる気配が無かった。先方が出るとき分かったことだが、首から下を宿屋のバスタオルですっぽり覆っていた。横の木に、「湯を汚すから、タオルで身体をくるんで入浴すること禁止」と出ているのに、平気の平左である。いささか鼻白んだものだ。この事件で、長年愛好していた野天風呂にも愛想が尽きた感がする。

長年妙高登山を続けていると定番のコースも飽きてくるので、池の平登山道を一回だけ辿ったことがある。これは山寮の玄関を出てから池の平スキー場を通り、山頂までひたすら登り続けるコースである。燕温泉までのタクシー代は節約できたが、夏の炎天下、草いきれのするスキー場のリフトの下を黙々と歩くのは大変な仕事であった。

スキーシーズンならリフト3回の乗り継ぎで到着するゲレンデの最高点の「カナメ」まで、3時間はかかったろうか。初め冗談も飛び交っていた一行もそのうち声も無くなり、諦めて足を交互に動かすしかなかった。スキー場を終え森林地帯に入ってから天狗平まで、結構な道のりでいささか参った思い出が強い。それ以来、この直登コースは止めにしている。

妙高ばかりでは私自身が飽きてくるので、3回に1度ぐらいは火打山に登ることにした。ここも結構長い道のりである。8時前に山寮を出る朝一番のバスに乗って笹が峰牧場へ、そこから登山が始まるが、途中にある高谷池でやっと昼飯、まだ半分の道のりである。池から見える火打山頂は嫋やかな姿で、実に魅力的であるが、しかしここからがまた長い。山頂に着くのがいつも2時か3時近くとなる。

来た道を一目散に駆け下っても、明るい内には入山口の牧場までは到底たどり着けない。星空を仰いで最後の樹林帯を、もくもくとひたすら歩く破目となる。その頃になると疲労困憊で声も出ない連中も出てくる。12時間を超える行動となり、今にして思えば素人集団をよくまあしごいたものだと思う。

隔年になったが後立山の爺ヶ岳にも、よく出掛けものだ。私の仕事小屋のあるエコノミスト村に前夜ゼミテンを泊め、翌朝車で扇沢

の出会いまで行き、そこから登山道に入ることになる。爺ヶ岳は妙高や火打に比べると、山頂までの距離が短く比較的楽である。しかし最初の１、２ピッチが結構きついこともあり、紅葉坂あたりでもうダウンという学生も時折現れる。もう帰りたいというのをなだめすかしながら、ともかく稜線まで引き上げるのには苦労したものだ。山頂まで４時間程度で辿り着ける上、そんなに険しい道でもないのでゼミ登山としてはまあまあのルートといえよう。もっとも地元では小学生の遠足コースのようだが。

天気に恵まれれば、剣・立山が一望の下に見える山頂はまさに感激の場所である。初めて山に来た学生で、これで病みつきになりすっかり山好きになった奴もいる。しかし雨の時には惨めであった。何も見えない中で傘を差し、寒さに震えながらそこで弁当を食べて後は下山という年もあった。爺ヶ岳登山はしばしば10月の始めにやったこともあり、全山紅葉で真っ赤、錦秋の一日を楽しめたこともあった。いま思い出しても、あの紅葉の色は鮮やかに目に浮かんでくる。

このようなゼミ登山にはいつも若いＯＢが数人参加してくれていた。そして私の家内も年齢をわきまえず何回か、若者に混じって奮闘したこともある。老若男女の混成パーティーは不思議なハーモニーをかなで、楽しい一時を共有してきた。

石ゼミの終わりと共にこのゼミ登山も姿を消すかと思ったが、面白いもので佐藤ゼミ（石ゼミ20回生の佐藤主光君のゼミ）のガイドとして雇われ、同じようにゼミ登山を楽しんでいる。今後、機会があれば続けたいものだと思う。

ここまで書いたら予定の分量を越えてしまい、スキー合宿の方を書く余裕がなくなった。いずれまたの機会にしたい。

（２００１年５月13日記）

ニュージーランド紀行

プロローグ

佐薙　恭（昭31）

「世界一美しい散歩道」と形容されるニュージーランドのミルフォードトラックのことは以前から知っていたし、身近な何人かの知人からその体験談も聞いていた。いい相棒を見つけていつか出かけたいと思っていた。たしか去年の針葉樹会新年会だったと思う。何となく石井さんと次のシーズンに出かけましょうかという話になった。石井さんは何年か前の11月、ご家族で出かけられたのだが、コース中のハイライト、**Mackinnon Pass** が大雪でその部分をヘリコプターで運ばれてしまったので未練が残っている様子、それにコース全体が再訪したくなるほど魅力的なものらしい。

　はじめはどこかのツアー会社の企画に丸ごと参加すればいいだろう程度に軽く考えていたのだが、そのアイディアには石井さんからすぐに「No」が出た。「団体旅行は面白くないよ」とのご意見だった。そこでＦＡＸやＥメールを使い現地の「Guided Walk」の予約や前後の日程の計画、宿の手配などを夏ごろから進め始めた。自分にとって未知の国でもあり多少の不安はあったがそれはそれで結構楽しい仕事だった。実行は現地の夏の天候が落ち着く筈の２００１年２月と決めた。

　参加者はむこうでのレンタカーの都合から、４、５人を目途に身近なところで「この指とまれ」をしたところ、石井、山崎、高崎、上原、小生の５人となった。メンバーの出発時の平均年齢は70・６歳だった。「Guided Walk」に参加する場合、70歳以上は医者の **OK Letter** の提出が必要だ。該当するお二人の先輩は日頃山歩きに励んでおられる様子なので心配無さそうだが、問題は遠からずその年齢に到達する高崎だ。出発１ケ月前になってもトレーニングや道具の準備をしている気配がない。そこで「先輩より先にバテるわけにはいかないぞ」とばかりに新年になって２週続けて丹沢日帰り登山に引っ張り出した。彼のレベルは合格点からは程遠かったが、彼の生家からの焼酎の珍品、「花垂れ」一本で私が買収されてしまったので「しごき」はそれ以降は有耶無耶になった。

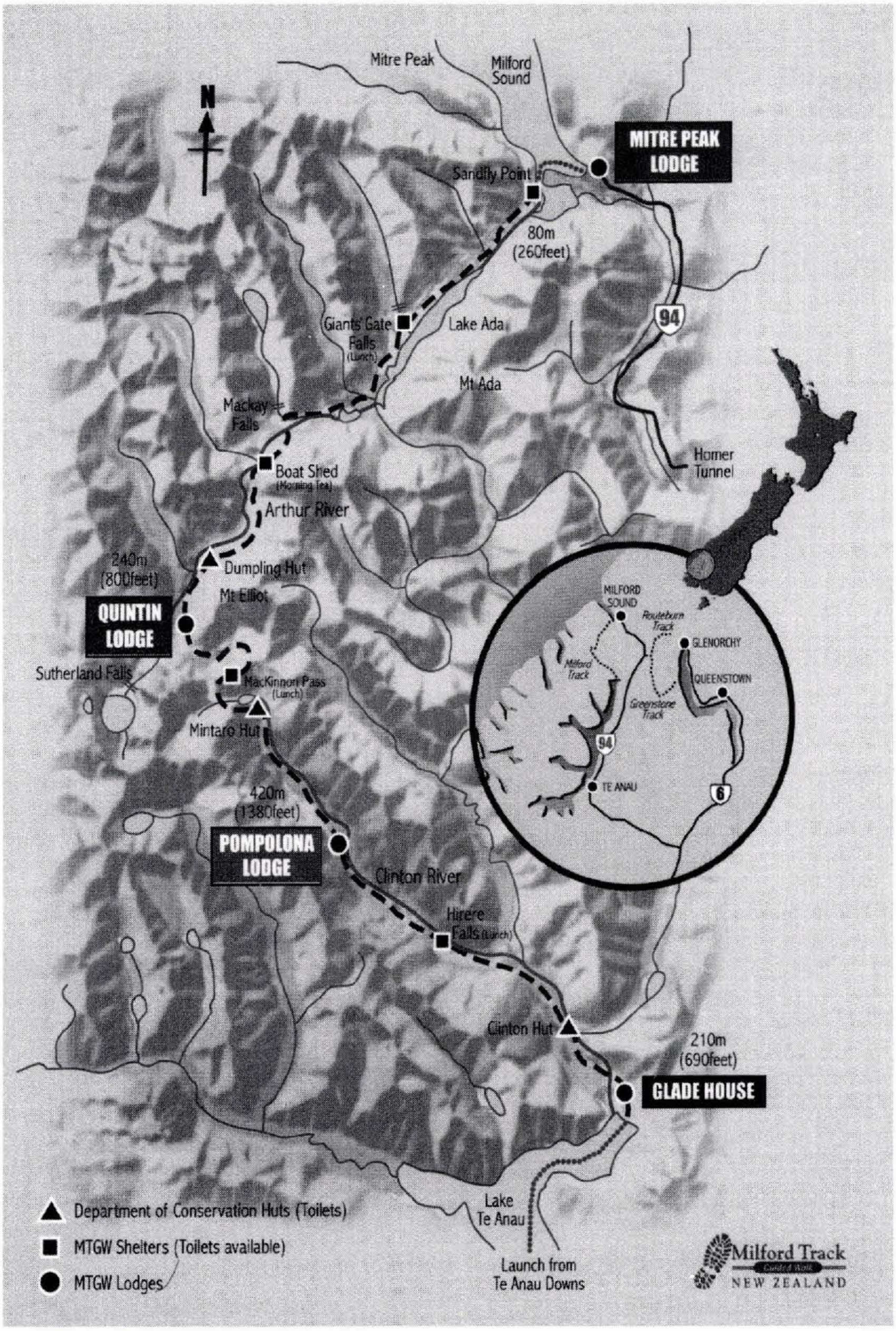
　そして石井さんとの話が始まってからほぼ一年経った２００１年２月、地球の反対側、南半球の国でのトレッキングへの、メンバーに恵まれた旅がいよいよ始まった。

ミルフォード・トラックのこと

石井　左右平（昭23）

　ニュージーランドにはいくつものトレッキング・コースがあり、その多くが **Department of Conservation**（ＤＯＣ＝自然保護省）の管轄下にある。**Milford Track** もその一つで、ＤＯＣの下で **Milford Track Guided Walk** という **private** の会社が経営している。約53キロのコースの中に４つのロッジがあり、そのキャパシティから一日50人までに限られたトレッカーが一方通行の道を歩く。ガイドつきというがトップと一番最後に彼らがいるだけで、その間を50人（マキシマム）が自由に歩く。朝ロッジを出て、次のロッジに夕方ま

でに着けばよい。最初のロッジから４つ目までで50人×３で１５０人が、ある日のこのコースを一方に向って歩いているわけだ。実はガイドつきでない、ロッジを使わない



independent walk という行き方があるが、それは別。

　私は、１９９１年11月に家族で此処を歩いた。その時のグループは26人で、オーストラリア７、日本６、ＮＺ５、ＵＫ４、米国２、フランス２だった。今度は、高崎君のメモによると、日本19、米国14、ドイツ６、ＵＫ５、オーストラリア４、ＮＺ２の50人。国別の構成が大変な変化である。また、日本人19人の内、全員の記念写真でかぞえてみると、10人が女性。この前は我がファミリーの二人だけだった。序でだが、１９９１年の秋の為替がＮＺ＄１が75円、今度が約52円。これをどう考えるかは、山と関係がない。

　尚、**Guided Walk** への支払いは、一人ＮＺ＄１５９０、これで昼の弁当を含む３食、ロッジ、ガイド等全てを **cover** する。また10年前は **no alchol** だったが、今度は、毎晩５人で盛大にワインを飲んだ。勿論、有料。

　旅の間、皮肉な事に、移動日などが快晴。山の中が雨、そして風という恵まれない天候だったが、楽しい毎日だった。

　全ての予約、経理等、なにもかにもやり、運転までしてくれた佐薙に感謝である。

Milford Track トレッキングと Mt. Cook 周辺の記録

高崎　治郎（昭31）

成田空港出発前に石井先輩から記録係に指名された。以下簡略な報告。

参加者　石井左右平　山崎擴　高崎治郎
　佐薙恭　上原利夫

日時　２００１年２月５日～２月17日

２月５日　20時55分　成田発

２月６日　晴　Christchurch 経由 Queenstown へ。

11時55分　Christchurch 着（時差４時間／サマータイム、飛行時間11時間）

14時40分　国内便に乗る。

15時30分　Queenstown 着。タクシーが払底、30分待っても街から戻って来ないのでハイヤーを呼ぶ。強風、低温に驚く。

17時00分　街の中心部に近い Ambassador Motor Lodge 着、キッチン完備の広い部屋。購入したビールとワインで乾杯後、同楽(Memories of H.K.）で夕食。宿にもどりまた歓談、12時就床。

２月７日　晴　Queenstown 観光

８時00分　起床（朝寝）、先輩達は早朝起床。市内で軽い朝食後、近くの Bird Garden でＮＺ固有の野鳥を見物。国鳥 Kiwi は保護暗室の中、静かに見るように注意書きがあり、壁際で２羽がかすかに動いているのが認められた。その後ゴンドラで展望台へ。街や湖を展望後、「ほたるぶくろ」の咲く山腹を歩いて下り宿にもどり喉を潤し、街へ。

14時00分　Wakatipu 湖の Earnslaw 号（1912年に２万ドルで建造した石炭焚き遊覧船）で対岸の Walter Peak へ。Scottish Hiland Cattle や鹿に餌をやり、牧羊犬の羊追いを見学後、羊毛刈り実演…１頭を５分。

18時30分　市内のステーションビルでツアーの説明会。日本人とそれ以外に分れての説明会。20名近い日本人参加者の多さに驚く。夕食はステーキハウスに行く。

２月８日　晴(Guided Walk Day 1)Queenstown から Glade House へ。

９時30分　ステーションビル集合。９時45分バスで出発。

12時00分　Te Anau 着、昼食。その後再びバスに乗り14時00分 Te Anau Downs で船に乗り換え Te Anau 湖を約１時間北上。湖上からの眺めが素晴らしい。

15時05分　Glade Wharf 着岸。15時20分徒歩スタート。16時45分　Glade House Lodge 着。

我々には二段式ベッド、６床の一室がいわば個室のようにあてがわれた。これはこの後、トレッキング中ずっと同じ。ロッジは水洗便所、男女別温水シャワー室、乾燥室完備。食堂では泥の着いたブーツは駄目。ロビーにはピアノがあり動植物の図鑑なども。

18時00分　夕食。食後ガイドの Bridget 嬢（21歳）からツアーの説明があるが、ＮＺ英語でよく判らない。石井さんや佐薙、それに欧米人でさえ完全には判らぬとのことで安心。説明の後、国籍別に簡単な自己紹介（名前と出身地）と歌唱、日本人は「上を向いて歩こう」を歌った。

２月９日　晴（Day 2) Glade House から Pompolona Lodge へ。（16㎞　６時間　歩行５時間）

８時35分　出発、９時30分～９時40分 Clinton Hut、12時05分～12時50分 Hirere Lodge（昼食）、14時35分 Pompolona Lodge 着。

トレッキング・ゴール地点にて。左から佐薙、上原、高崎、山崎、石井の各氏。

Glade House の広い河原を過ぎ、Clinton River の吊り橋を渡り、右岸のぶな林の中の整備された平坦な道を1時間ほど行くと、自炊小屋の Clinton Hut がある。ぶな林を抜けると、氷河でU字型に削られた谷に出る。両側の直立した壁の高さは千メートル以上に及ぶという。行く手の遠くに、明日越える峠の Mackinnon Pass 小屋が見えた。夕方ロッジの近くの森で沢山の Kea（ミヤマオウムというカラスくらいの大きな鳥）が集って騒いでいた。昼食時にはこの鳥が1羽、サンドイッチを狙って近くまでやってきた。ガイドからの事前の注意もあり、ちょっとした凶器にもなり得る鋭い嘴を見るととても友好的に餌など与える気にはならなかった。

2月10日　雨（Day 3）Pompolona Lodge から Quintin Lodge へ。（15 ㎞　8時間　歩行6時間30分）

9時15分～9時30分　Lake Mintaro、11時20分～11時30分　MacKinnon Pass、12時00分～12時50分　Pass Hut、15時35分　Quintin Lodge

霧雨のため、雨具で出発、Clintin River の上流の吊り橋を渡りしばらく行くと、ジグザグの坂道となる。高度差７００ｍをこなし、このトレッキングのハイライトの最高地点 MacKinnomn Pass に着いても、小雨と強風のために寒く、サザンアルプスの雪山の展望は全く無く残念。Pass Hut 小屋で雨具を脱ぎ昼食。ガイドの作った温かい飲み物が有り難い。この小屋からの下り6キロ（高度差８００ｍ）は歩行もきついが、一番景色も美しいと書いてあるが雨のため無念。

苔に覆われた森林の中をしばらく行くと Quintin Lodge へ。ここより往復1時間でもう一つのハイライト、世界で5番目の落差（約５７０ｍ）の Southland 滝へ行こうと思ったが先に行って帰ってきた人の話では、雨のため、道路が膝近くまで水没しているというので皆諦めたが、佐薙だけは、靴をサンダル靴に履き替えて、右代表として見て帰ってきた（石井さんは前回見物済）。荷物をヘリコプターで運ぶサービスがあるとガイドが説明。佐薙を除く4名の荷物の一部を明朝依頼することにした。

2月11日　雨（Day 4）Quintin Lodge から Mitre Peak Lodge へ。（21 ㎞　7時間10分　歩行約6時間）

7時50分　小屋発、14時15分　Giant Gate Fall、15時10分　Sandfly Point、15時20分　フェリー出帆、15時50分　着岸、16時00分　Mitre Peak Lodge

終日の長距離行程、フェリーに間に合うためにと殆ど休みなしに雨の中を黙々と歩く。高度差のない平坦な整備された道で荷物も軽くなったので快調に飛ばす。途中、道を整備する老人、女性やトラクター（日本製）の作業員に出会ったが、彼らの労苦に感謝。昨日と違って、周囲の苔むした大木や Ada 湖の大きな湖を眺める余裕も出来て、フェリーの第一便の出帆直前に終点に着いた。終点で記念撮影。Sandfly Point はブヨの大群がいた

ので、第一便に飛び乗った。地元の民話によると、この美しい環境に人々が長居をして自然を汚さないように神様がここでブヨsandfly の大群で人々を追っ払うことにしたのだという。ホテルで55㎞完歩の証書を各自に授与されて感激。

2月12日　快晴（Day 5）Milford Sound (Fiordland) から Queenstown へ。

9時00分から10時50分まで Boat Trip、11時00分　バス乗車、15時40分　Queenstown 帰着解散。

ホテルをバスで出て、すぐ桟橋でクルーズに乗りこむ。フィヨルドの入江の奥の Mitre Peak 峰は水際に垂直に屹立した岩山で、若い岳人の登頂意欲をそそる山だ。船はフィヨルドの左岸の近くを進み海洋へ出て反転して反対側右岸を帰る。所々にアザラシが岩の上で寝そべっていた。イルカの大群やペンギンには残念ながらお目にかかれなかったが、両岸の絶壁や滝など素晴らしい景色を満喫した。桟橋でまたバスに戻り、１９５０年代に完成したHomer Tunnel へ Divide 峠を越え、Te Anau へ寄ってから、Queenstown の街で解散。これで Guided Walk の全行程を終了。明日からは我々だけの追加自由行動となる。

前回と同じ宿舎へ。夕食は石井さんが昔行ったことのある中華料理店へ。伊勢エビを特注し、紹興酒で乾杯。宿に戻ってから、また部屋でダベリながら杯を傾けた。ＮＺのワインもビールも評判は聞かされていたが値段はリーゾナブル、味は申し分なく全行程中十分に楽しんだ。

2月13日　快晴　Queenstown から Mt.Cook Village へ。

午前中 Queenstown Garden など散策。13時30分レンタカー（車種はトヨタのミニバン）で出発。運転は以後佐薙、途中一部を石井さんが交代。Wanaka という部落を経て、途中買物などして17時55分　Mt.Cook Hermitage Hotel にチェックイン。夕食後、南十字星やオリオン座を眺める。

2月14日　晴のち曇り後時々小雨　Hooker Glacier と Tasman Glacier へ。

5時40分　Morgenrote の山並みを眺めるために早起きして刻々と変化する山容を楽しむ。

朝食後8時30分出発、8時40分キャンプ場に駐車し、Mt.Cook Range の左側、Cook River の左岸、右岸のトレールを遡上する。10時05分～10時30分　Hooker Glacier 末端の自然湖まで行くが強風で寒く引き返す。湖岸に流れ着いた氷河の端片は透き通るガラスのようで美しい。12時20分　宿舎帰着。上原君が作った味噌汁で休憩。13時50分　宿舎発、14時50分～15時05分　Tasman Glacier View Point、15時50分　宿舎帰着。

朝焼けは天候が崩れる前兆だが、午前中は晴天で Mt.Cook を間近に眺められたのは幸運であった。氷河の奥の Mt.Cook の勇姿を目に焼き付けて帰途についたが後から続々と登って来る登山者が多く吊り橋渡りを待つ程だ。午後は Mt.Cook の最大の Tasman Glacier へ車で出かけた。風は益々強く、雲も増し Glacier View Point では長居が出来ずに引き返す。

2月15日　Red Tarns 往復　曇り時々雨

10時55分　宿舎発、11時45分～12時20分 Red Tarns、13時00分　帰着。

山崎さん提案の Mt.Cook 周辺と氷河見物のヘリコプター遊覧を申し込んだが悪天候のため昨日同様飛ばない結論が9時に判明した。上原君が料理のため残り、4人はすぐ近くの南側の山、Sebastopol(１４６８ｍ)へ向った。急坂を登り、Red Tarns（赤い浮き草の小さな湖）で休憩。その上の道が悪そうなのと天候も崩れてきたので下山したが、途中で小雨

が降ってきた。宿舎では上原君料理のハムエッグとスパゲッティのご馳走になった。さる高名な料理学校に通った彼の腕前はなかなかのものでこのまま眠らせてはもったいない。

2月16日　曇りのち時々晴れ　Christchurch へ。

6時50分　宿舎発、7時55分　Lake Tekapo 南端へ。1935年建造の Church of the Good Shepherd に寄る。湖畔にケルン林立。我々も一つ追加。11時10分　Christchurch の植物園着。昼食後園内散策。美しい花と巨木が印象的だった。13時45分　空港近くの宿舎着。16時45分　タクシーを呼び街へ。Cathedral 参観後、買物とNZ最後の夕食。

2月17日　曇り　空路 Aukland を経て成田へ。

7時45分　宿舎発、19時35分　成田着、解散。事故もなく良かった。

記録後記

石井さんがもう一度NZの山へ行きたいと言われるが、お前も行くかと佐薙に誘われたので是非連れていってくれと頼んだのが昨夏のこと。登山申し込み、チケット手配など全てを佐薙が手配してくれたし、トレーニングまで丸抱えだった。

今回の遠征は先輩後輩が、毎晩食後遅くまで、ワインなど飲みながら語り合って非常に楽しかった。今後も、厳しい山、危険な山でなくこのような楽しい山行計画が増えると良いと思った。

ニュージーランドは日本の70％の広さの国土に、380万人（横浜市の人口より少し多い。日本の3％）しか住んでいない。ミルフォード・トラックはガイド3人付で、1日わずか50人の入山許可、しかも、一方通行で、反対側から来る人には4日間一人も出会わない。山小屋は各室2～6ベッドの広い部屋で、設備完備。日本の夏山の北アルプスの小屋や世界遺産の屋久島の夥しい登山客も何とか考える時が来たのではないかと思った。

ミルフォードを歩く　共唱共随の夫婦達

上原　利夫（昭33）

ニュージーランド南島のミルフォード・トラックを歩く、五日間のガイド付ツアーに参加した。The Finest Walk in the World（世界一美しい散歩道）に魅せられて、日本、アメリカ、ドイツ、イギリスなど世界から集った山の愛好者が五十人。そこには十九組の夫婦がいた。ここで私の目は大勢を占める夫婦に向う。

二月八日出発のこのグループには、日本から五組の夫婦と女性四人に私達男五人が参加した。十九組の夫婦達は、中年の二組以外は子育てが終った人たちだ。山歩きのカップルだから、それぞれ中型のリュックを背に、軽登山靴を履き、風雨をしのぐ完全装備を怠らない。夫婦の荷の重さに差はなさそうだ。一般の旅行者とは違い、夫人は女性らしさを保ちながらも甘えがない。自立心が強そうで活発で明るい。特に外国人はそうである。

この地域は自然保護のため、入山者数が制限される。夏の十一月から四月まで、毎日五十人のグループが出発し、泊まる次のロッジを目指す。歩き応えがあるのは中三日。二日目に緩い登り十六キロ、三日目に峠越えの急な登りと降り十五キロ、四日目に起伏が少ない森林の中を二十一キロ、一方向の道を、抜きつ抜かれつ思い思いに歩く。

私達の三日目は風雨だった。マッキノン峠の休憩小屋に辿り着き、汗と雨でぐっしょり濡れたまま、ガイドの作ってくれた温かい飲み物に一息入れ、持参のサンドイッチをほおばる。晴の日は絶景らしいが、登山にはこのような禊もある。

その翌日だけに、四日目の苔むす長い道のりでは、体力に差が現れた。夫人をいたわり、あるいは夫をいたわるタイプ。また、近所に住む二組の夫婦が四人で行動を共にする護送船団タイプもある。日本とドイツだった。

このように夫婦が共に歩き通せた満足は、絶景よりも、悪天候に耐えるほうが大きいだろう。ミルフォードを歩く夫婦は、夫唱婦随か婦唱夫随か分らない。共唱共随かもしれない。各人に「完歩証」が授与された時、そのように思った。

70才のトレーニング

山崎　擴（昭23）

今回の旅行が成功裡に終えることが出来たのは佐薙君の綿密・周到な準備と5人のチームワークの賜であったが、私個人として最も気を使ったのは体力の問題であった。幸い約2週間にわたって「若い」諸君と歩いて、特に迷惑も掛けずに過せたのは多少とも日頃から年なりの体力作りをしていたからとも思うので、この年になってどんなことができるのか、旅行とは直接関係無いが、これから年をとる人々の参考に書いておこう。

現在幸いなことに勤め人であるので、往復3時間の通勤をしており階段だけでも800段ほどを毎日昇降する。これに休日の散歩等を加えれば日常的な運動としては事足りていると思われるが、月1回でも山歩きをしようなどと考えるとこれでは加齢の右下がり曲線を緩めることには不足する。それで少しウエートトレーニングを加える。

今は7ポンドのダンベルと8ポンドの砂袋で上肢と下肢の強化をする。週に2日ぐらい行う。上腕筋や大腿筋などは比較的簡単に強化できる。道具を使わなくても例えば電車で吊り革につかまれば、懸垂や爪先立ちができる。寝る前の歯磨きの時、両足あるいは片足の膝屈伸は結構効く。これに5秒間の静止を加えればなおよい、等々。

食事や生活習慣に注意するのは当然であるが、各パーツは遠慮会釈なくガタつき、綜合的な体力の下降は上記のような努力をしても容赦なく襲ってくる。なんとか努力を続けて1日でも長く歩いていたいものだ。

平成13年度針葉樹会総会報告

平成13年6月28日
於　如水会館

1 平成12年度活動報告

①懇親山行

平成12年10月28・29日　有明山山麓（参加者　約10名）

「有明山登山をもくろむも朝より雨が降っており断念。前夜は中島未亡人のご厚意に甘え、大町エコノミスト村に宿泊。中島寛さん、中村慎一郎さん、万濃さんに対する思いを新たにした小旅行になりました」（山行幹事）

参加者＝丸山、倉知、三森、俵、西牟田、松尾、加藤（博行）、佐藤、近藤（活）、稲毛、中島未亡人

②会合

幹事会　Eメールを活用して打ち合わせ
評議会　平成12年6月23日
総会　平成12年6月30日
新年会　平成13年1月25日

③出版物

針葉樹会報91号　平成12年6月発行
針葉樹会報92号　平成12年11月発行
針葉樹会報93号　平成13年3月発行

2 平成13年度活動計画

①懇親山行

●平成13年秋（候補日11月17・18日）
（山行幹事より）
「松尾信孝会員のペンション『アダージョ』を拠点に蓼科山、美ヶ原等を予定しております。貸切を予定しておりますので、できるだけ多くの方の参加をお願いします。家族・友人・知人等の同行も歓迎。日程は変更になる可能性もあります。できるだけ早く会員諸氏にご連絡する予定です」

●平日山行　平日の山行を計画します。

②会合

幹事会　平成13年6月15日
評議会　平成13年6月22日
総会　平成13年6月28日
忘年会もしくは新年会
　平成13年12月（または同14年12月）

③出版物

針葉樹会報
第94号　平成13年7月発行予定
第95号　平成13年11月
第96号　平成14年3月
会員名簿（簡易版）　会報の発送時期に合わせ、年1回発行予定

3 役員改選

会長　石原　脩（留任）
副会長　高崎　治郎（留任）

①評議員（平成13年度）

小林　茂雄　S19（留任）
石井左右平（議長）S23（留任）
中村　正司　S28（留任）
山本健一郎　S32（留任）
中村　保　S33（留任）
市畑　進　S33（留任）
高橋　信成　S38（留任）
原　博貞　S42（留任）
中村　雅明　S43（留任）
西牟田伸一　S47（留任）
井草　長雄　S48（留任）
兵藤　元史　S52（新任）←藤本敏行
近藤　泰　S53（留任）
白石　章治　S61（留任）

③幹事（平成13年度）

代表幹事　兵藤　元史（新任）←藤本敏行（退任）
総務幹事　松田　重明（新任）
　古田　茂（留任）
会計幹事　西牟田伸一（留任）
会報幹事　佐薙　恭（留任）
　井草　長雄（留任）
　川名　真理（新任）
　大谷　公重（留任）
山行幹事　山本健一郎（新任）

丸山　則二（留任）
高橋　信成（新任）
近藤　　泰（留任）
学生幹事　井上　裕之（留任）
古瀬　泰介（留任）
保険幹事　廃止　↑岡部晃和（退任）

④監事（平成13年度）
渡辺　嘉佑（留任）
中村　雅明（留任）

⑤新入会員　なし

⑥逝去会員
増山清太郎　平成12年8月12日
冠木伊右衛門　平成12年11月17日
松下　順吉　平成13年2月20日
笠原　広信　平成13年4月15日
樋口　洪　平成13年6月3日

4山岳部室内クライミングウォール設置の件　――部室整備基金の活用

学生から、部室整備基金50万円を活用して部室内にクライミングウォールを設置したいとの提案があり、承認されました。付帯条件として、このクライミングウォールを新入部員獲得のため積極的に活用することとの一札がつけられました。

なお、小林博氏（昭33）から一橋山岳部のためにと「財団法人一橋大学後援会課外教育振興基金」へ30万円の寄付が寄せられました。おかげで、この基金から70％（21万円）が建設資金に充当してもらえることになります。

5針葉樹会年会費見直しの件

会員構成の変化（高齢化・若年会員の減少）に伴い、会費が免除となる会員（卒業後50年以降）の割合が増加するため、会費収入の減少が予想されます。そこで、会費制度の見直しが昨年度総会でも議題となりました。

改革案は、年会費一律5000円、ただし卒業後61年目以降は会費免除というものです（現行は、卒業後10年まで4000円、～20年5000円、～40年6000円、～50年4000円、51年目以降は免除）。

これについては、12年度は会計幹事の努力もあって過去の滞納分がかなり納入されたため収支が改善し、とりあえず13年度については見直しは行わないことになりました。

なお郵便局の振込用紙を同封しましたので、会費の納入をよろしくお願い申し上げます。

6一橋山岳部創部80周年記念事業及び「針葉樹15号」の件

一橋山岳部が創設されたのは1922年（大正11年）であり、来年2002年は80周年にあたります。

そこで、評議員会において石原会長より、何らかのかたちで80周年記念事業を行ってはいかがであろうかとの提言がありました。

記念事業の案としては、①記念誌の刊行、②記念登山（海外遠征）、③記念パーティ等の一般的なものから、「もっと画期的な一橋ならではの、前向きの企画はないものか」等々の意見が出ました。

また、他方では「針葉樹」も1985年に14号が発刊されて以来、途絶えており、「針葉樹15号」の発刊についても具体的に動き始める必要がある。80周年と抱き合わせにすることは可能か、との意見も出ました。

そこで、評議員会としては、80周年記念事業検討委員会を設け、具体的なプラン策定に取り掛かることにし、これを総会において承認いたしました。

委員会の名称＝80周年記念事業検討委員会
目的＝創部80周年記念事業の具体案検討。併せて「針葉樹15号」の発刊についても具体案を検討する。
スケジュール＝検討期間は半年。来年初めを目処に具体案を評議委員会・総会に諮ることを目標とする。
委員会構成＝委員長　佐薙恭
委員　西牟田伸一、井草長雄、兵藤元史、その他数名

針葉樹会平成12年度一般会計決算

（平成12年6月1日～平成13年5月31日）

支出			収入		
項目	実績	予算	項目	実績	予算
会報発行費	338,940	350,000	前年度繰越	2,844	2,844
山岳部補助	140,000	140,000	納入会費	713,000	640,000
通信連絡費	156,652	120,000	総会余剰金	4,810	1,000
慶弔費	26,250	56,000	部室整備基金より	0	100,000
学生保険補助	16,000	20,000	郵便貯金利子	339	0
新年会補助	9,264	0	〃（部室整備基金分）	325	0
次年度へ繰り越し	34,212	57,844			
合計	721,318	743,844	合計	721,318	743,844

H12年度納入会費実績内訳

	千円	%
当年度分請求計	762	100
当年度分未徴収計	△ 159	△ 21
過年度分徴収計	102	13
次年度分徴収計	8	1
実入金額計	713	93

針葉樹会平成12年度部室整備基金決算

（平成12年6月1日～平成13年5月31日）

支出			収入		
項目	実績	予算	項目	実績	予算
設備費	0	380,000	前年度繰越	500,000	500,000
雑費	0	20,000			
一般会計へ	0	100,000			
次年度へ繰り越し	500,000	0			
合計	500,000	500,000	合計	500,000	500,000

針葉樹会平成12年度遭難対策基金決算

（平成12年6月1日～平成13年5月31日）

支出			収入		
項目	実績	予算	項目	実績	予算
学生保険補助	16,000	20,000	前年度繰越	5,131,275	5,131,275
		0	内遭難対策基金	4,231,275	4,231,275
			内遠征基金	900,000	900,000
					0
次年度へ繰り越し	5,138,600	5,144,275			0
内遭難対策基金	4,238,600	4,244,275	一般会計より（学生保険補助	16,000	20,000
内遠征基金	900,000	900,000	利息等	7,325	13,000
合計	5,154,600	5,164,275		5,154,600	5,164,275

残高内訳	
ワリシン通帳残高	2,400,000
	1,000,000
普通預金通帳残高	1,722,511
記帳されない金額	16,089
合計	5,138,600
差異(残高不足)	0

針葉樹会平成13年度一般会計予算

（平成13年6月1日～平成14年5月31日）

支出			収入		
項目	金額	前期実績	項目	金額	前期実績
会報発行費	450,000	454,725	前年度繰越	34,212	2,844
山岳部補助	90,000	140,000	納入会費	650,000	713,000
通信連絡費	50,000	40,867	雑収入	0	4,810
慶弔費	50,000	26,250	郵便貯金利子	300	339
学生保険補助	20,010	16,000	〃（部室整備基金分）	300	325
新年会補助	0	9,264			
次年度へ繰り越し	24,802	34,212			
合計	684,812	721,318	合計	684,812	721,318

針葉樹会平成13年度部室整備基金予算

（平成13年6月1日～平成14年5月31日）

支出			収入		
項目	金額	前期実績	項目	金額	前期実績
設備費	500,000	0	前年度繰越	500,000	500,000
				0	
次年度へ繰り越し	0	500,000			
合計	500,000	500,000	合計	500,000	500,000

針葉樹会平成13年度遭難対策基金予算

（平成13年6月1日～平成14年5月31日）

支出			収入		
項目	金額	前期実績	項目	金額	前期実績
学生保険補助	20,010	16,000	前年度繰越	5,138,600	5,131,275
ビーコン購入	120,000		内遭難対策基金	4,238,600	4,231,275
(学生使用の雪崩捜索機器)			内遠征基金	900,000	900,000
			一般会計より(学生保険補助	20,010	16,000
次年度へ繰り越し	5,025,900	5,138,600	利息等	7,300	7,325
内遭難対策基金	4,125,900	4,238,600			
内遠征基金	900,000	900,000			
合計	5,165,910	5,154,600	合計	5,165,910	5,154,600

第93号記事訂正と注記

前号93号掲載の「本をめぐって」のうち、中村保氏の著書表題（23ページ記載）に誤りがありました。正しくは

『深い浸食の国――ヒマラヤの東・地図の空白部を行く』

ですので、おわびして訂正させていただきます。

同時に、前号の山本健一郎氏の記事では、本書の内容紹介については触れられていませんでしたので、この機会に簡単に以下紹介させていただきます。

本書は、四川省、雲南省、東チベットにまたがる、いわゆる〃ヒマラヤの東〃の、知られざる広大な山域全体の複雑な山系を体系的に区分して紹介（第1章）するとともに、一九九六年から二〇〇〇年わたって幾度かに分けて行なわれた著者の同山域探査記録が、探検史にまつわる挿話などをちりばめながら披露されている紀行集である。

この中村さんの一連の探査行は、〃旅を動機づけるキー・ワードは「新しい発見の旅」と「小さなパイオニア・ワーク」〃であり、〃山を主題とし、歴史や民俗にかかわるテーマを組み合わせて旅程〃を組む、というものであり、第11章までにわたる本書の各章では、ひとつひとつそれぞれ別のテーマをもったユニークな旅の物語が語られる。

そのうちいくつか既に本会報に寄稿されたものがあり、第2章・梅里雪山一周の旅（会報85号・梅里雪山巡礼記）、第8章邛崃山系の岩峰群（91号・四川省……をめぐる未踏の岩峰群）、第9章・探検史紀行――旧川蔵公路（90号・旧東チベット・カンバの世界を往く）、などは会員諸兄が大綱を知るところであるが、本書では数々の迫力ある未踏峰群のカラー写真と行程を追った地図とともに詳しい旅の様子が展開され、新たな感動を呼び起こしてくれる。

その他にも、この辺境山岳地域の探検史に登場する初期探検家の足跡を追って、未だベールに包まれたままの未踏山系を登山的見地から解明するといういくつかの探検行や、探検史の舞台となったいにしえの踏査ルートの調査行について述べられている。

それらは例えば、東南チベットのカンリガルポ山群核心部踏査（第4章）、四川省西端の未踏山群、党結真拉山塊と托礼金甲博・夏塞山塊の探索（第11章）、などの登山者の観点から極めて興味深いものであったり、また先駆的チベット探検家・能海寛の足跡をたどる旅（第6章）、辺境の宣教師パターソンをめぐるふれあいや埋もれたチベット人探検家ペレイラの紹介（第10章）、など探検史にまつわるストーリーも語られている。

こうして読者は、この山域の総合的な文献としては世界に類書を見ない本書により、最も知られざる山岳地帯の概観を知り、その歴史や民俗に接して、詩情豊かな未知の国をたどる夢をおいかけることができる。

（K）

編集後記

＊本年2月の松下順吉さん（昭19）に続いて、4月15日笠原広信さん（昭24）、さらに6月3日樋口洪さん（昭22）が亡くなられました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

＊前号の編集後記に朝日新聞社出版の週刊日本百名山のことが書かれていますが、そのNo.8「槍ヶ岳」に石弘光さんが執筆されています。文中には思い当る人も登場しています。公務に超多忙の同氏が今号に寄せられた一文と併せてお楽しみいただけたらと思います。

（佐薙）

＊総会報告にもあるように、今年度から会報幹事が一名増えました。若手からの寄稿が少ないので、このあたりの層の「掘り起こし」に力を発揮してもらえるのではないかと、期待しております。ついては、みなさんのご協力をよろしくお願いいたします。

（井）